地質ニュース476号，45-53頁，1994年4月
Chishitsu News no. 476, p. 45-53, April, 1994

ライマン雑記(10)

副見恭子

北海道地質測量調査

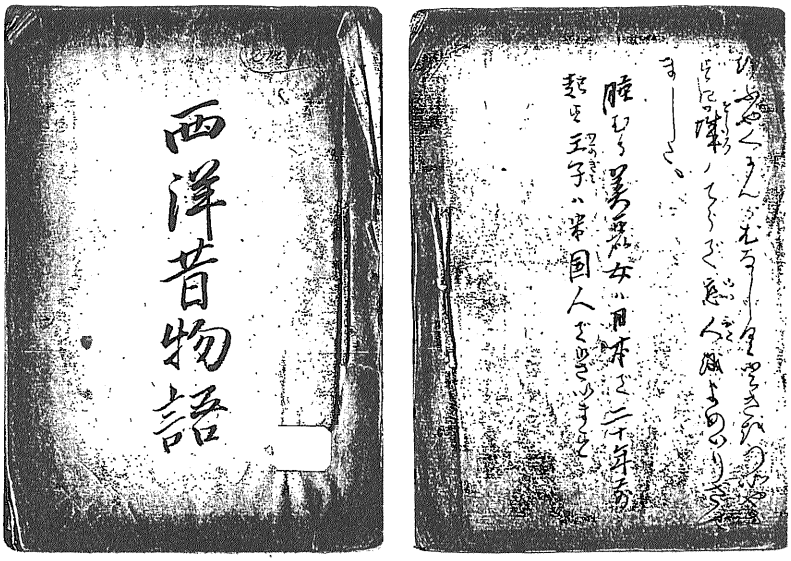
1. 森の美女・蝦夷地

ライマンの色刷全島地質図の着想は，雨天の為足留めを食い，オホーツク海に面する紋別の本陣で，蝦夷地図に鉛筆で緯度・経度の線を入れた日，即ち1874年(明治7年)9月14日に誕生した．彼のアイディアは，「日本蝦夷地質要畧之図」として実を結んだ．現在に至っても，地図愛好者はおろか，一見した誰もが感動する作品である．明治8年，ライマンが新年のプレゼントとしたと言われる眠り姫の和訳「西洋昔物語・森の中にねむれる美女」の最後に，「睡むる美麗女は日本で，二十年前起す王子は米国人でございます」とあるが(第1図)，筆者には前者が当時の果てしなく続く処女林に覆われた蝦夷地で，後者がライマン自身にどうしても思われてならない．

明治6年，第一回北海道調査のライマンは，開拓の理想に燃えた初々しいプリンスであった．1月18日来日，江戸の生活に馴染みもせぬ3ヶ月後の4月18日蝦夷へ出発した．21日函館着，その後11月10日までの約7ヶ月の間に，石狩・後志・胆振各地方の石炭・石油・硫黄・砂金等を踏査した．日中は山野を跋渉して調査し，夕べはしばしば川岸にテントを張って露営し，雨天の日はテント内で，助手達に数学を教えるか，日本語を自習する月日を過ごした．一方ケプロンに伴って，移民開拓地を視察したり，榎本(武揚)・荒井(郁之助)・松平(太郎？)等の，ライマンの言葉を借りれば，反逆者達と交際したのもこの頃である．

明治8年は落日の年で，黒田および開拓使との溝は益々深まり，5月にケプロンが離日した後は，ライマンの意に反し幌内鉄道測量に従事させられた．

それに反して明治7年第二回北海道調査は，全島を殆ど一周し，文字通りの人跡未踏の奥地に入り，悪路に難渋をきわめ，辺地の苫屋に風雨をしの



第1図
「西洋昔物語　森乃中にねむる美女」の表紙(左)と同最後(右)
以下第2図を除き全てマサチューセッツ大学図書館　スペシャルコレクションズ　ライマンコレクション蔵

1) マサチューセッツ大学図書館ライマンコレクション委員
8 Eaton Court, Amherst MA 01002, U.S.A.

キーワード：ライマン，北海道地質測量調査

ぎ，時には食糧が不足した凄絶な調査旅行であったが，プリンスの面目が躍如としている．日記風の興味深い報告書を提出し，ケプロンを殊の外喜ばせた．松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調紀行」と好一対と言うべきだろうか？　報告書を骨組にして，1884年の北海道調査を書くことにする．

2.　函館—札幌(5月20日—6月4日)

明治7年5月19日暁，汽船“ニューヨーク”で横浜を出帆．20日夜半函館着

26日，ケプロン・ディ(Day, Murray．北海道開拓使測量長)・荒井と共に，午前9時札幌へ向った(第2図)．七重・峠の下・宿野辺を経て森に午後4時30分着．27日は，森から連絡船“しんび丸”でTokarumui(新モロラン)へ．噴火湾を渡るのに，折からの荒波で7時間半かかった．28日モロランで水深測量し，午後はケプロンと共に予定開拓地を視察した．

29日は，ケプロンと一緒に再び“しんび丸”に乗り，有珠(うす)に近いMombets(伊達紋鼈(だてもんべつ))でなかろうか？)開拓農地を訪れた．その後3日間は，幌別の橋が出水で流され通行不能の為，Tokarumuiに滞留．

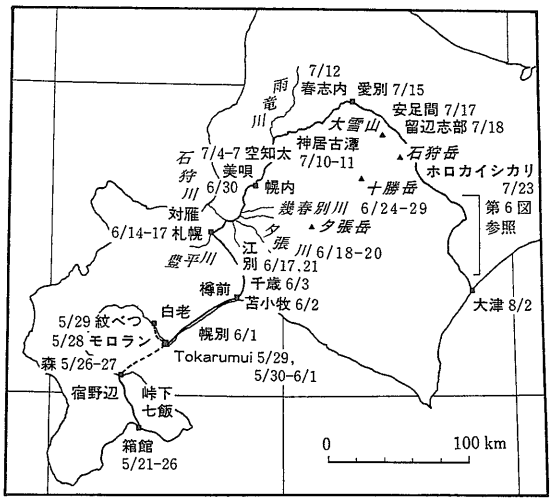
6月2日，ケプロン一行は白老に進み，途中樽前の茶店の主人から2月8日の樽前火山大爆発のすさまじさを傾聴し，苫小牧に一泊した．翌3日は，千歳より新道を通ってShimamappu(島松？)に午後2時に到着し，松本知事の出迎えを受けた．4日札幌着．新道とは，明治6年に完成された室蘭から札幌への官製本道である．

それにしても，この旅は明治初期の北海道の交通が如何に不便であったかを，如実に語っている．

3.　札幌—神居古潭 注1)(6月17日—7月10日)

さて6月17日10時28分，ライマン一行は2隻のボートと11そうのカヌーで，6インチ程水かさを増した豊平川から大遠征の壮途についた．一行はライマン・秋山美丸・通訳・使用人2人・船員・日本人およびアイヌ人夫の多勢で，十勝川で食糧補給が行われるまで，約75日分と見たてて米を主とする食糧を用意した．

対雁(ついしかり)2時6分，ここから常より12フィート嵩んだ灰色の石狩川に入る．ライマンは，去年よりも沿



第2図　ライマン一行の1874年調査路—函館から大津まで

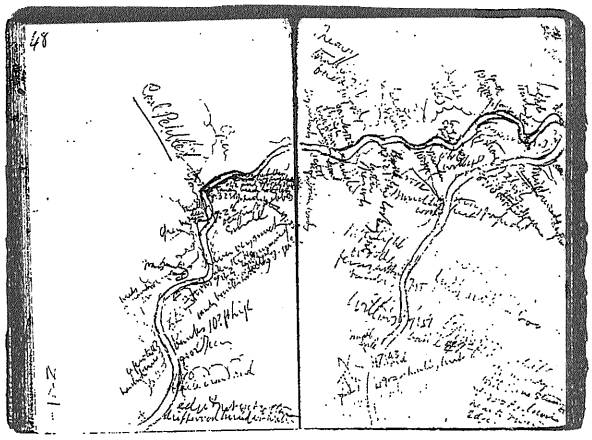
岸の開拓が著しく進んでいるのを目撃した．5時過ぎに江別川口のキャンプ地に着き，ライマンの日課となる水泳をした後，第1日を終えた．

翌18日，ライマン・通訳佐藤・別当幸太郎・コック兼ボーイ野村・江戸からの人夫2人，アイヌ人夫21人(1そう当り3人が7そうのカヌーに分乗)の一行が，10日分の食糧を積み込んで，江別川口基地から夕張川へ向け乗り出した．

フィールドブックのページ毎に描かれた川の変遷によって，一目で蛇行する大河と気付く．Low bamboosとあちこちに書かれ，北海道特有の熊笹が目に浮ぶ．川辺に立つアイヌの一軒家・大木・高原・密林・羊歯・札幌岳の山容のスケッチもあり，次ぎ次ぎとページをめくっていくのは楽しい．

19日の航行図に，夕張川の何処か定かでないが，“Coal Pebbles !”と興奮して書いた大きな字が目をとらえた(第3図)．これは小石とともに散在する炭塊から，幌内に匹敵する石炭層が夕張盆地に在りと，ライマンが予言した発端ではないかと思うと感慨無量である．

一日の仕事が終ると，夕張川辺のキャンプ地で，アイヌ達は黄昏近くまでゲームに打ち込む．「…2組が約20ヤードはなれ，6インチ直径の輪を投げる．相手側は槍の様な多分カヌーを漕ぐさおであろう長いさおで，輪をつっかけようとする．槍を空中へ高く上げ，輪をキャッチしようと前へ突進する光景は，一幅の絵であった」とライマンは描いてい



第3図　夕張川と Coal Pebbles

る．彼がアイヌを見る眼は，松浦武四郎と同じく，好奇心一杯で，温かい．

21日，ライマン一行は流れにのって，速かに江別川口の巣に帰った．次の踏査に備え夕方新しく石狩アイヌが，千歳と白老アイヌに加わった．

22日，7そうのカヌー(1そうに4人のアイヌを割り当て)と共に，7時9分次の目的地 Poronai(幌内)へ出発した．12時7分に石狩川と幌内川の岐点で昼食．幾春別川へ入ると突然川上が騒がしくなり，カヌーが現れた．幌内調査を終えた一隊の帰りで，ライマンは急ぎこれまでのケプロンへの報告を託した．

翌日は，頭上に日が照り，一日中川の旅が続いた．深林の中を曲りくねった川に沿って遡行．皮を広げて干してあるのは鹿狩りの日本人ハンターのキャンプ．コタン，再び森林と，結構舟旅は変化に富む．昼近くアイヌ達が，3,4羽の若いかもを素手で捕えた．4時45分去年と同じ幌内川口のキャンプ地に到達した．

24日—29日は殆ど雨天が続き，幌内で従事する助手達の報告を聞いたり，測量についての講議や実習指導を行った．雨が止むと蚊がすさまじい．

30日空知へ出立した．当夜は美唄川から2マイル程に位置する地狭 Bibaidappu にテントを張ってキャンプした．

7月3日，幾多の支流を通り空知太に達した．途中コタン Urashinai で石狩中流地域を熟知する数人のアイヌを，空知ではガイドを雇った．

4日—7日の4日間，石炭を求めて奥地へ入り，丹念に調べた．ライマンは，去年榎本武揚が持って帰った炭塊のサンプルは特に良質の石炭であるが，全部がそうでないと述べながらも，空知炭層の将来性を大いに認めた．また幌内と空知の炭層とが連なっていることを予想し，石狩炭田を開いて鉄道を敷き，石炭を札幌を経て小樽前へ輸送するのを可とした．

秋山美丸の一行が加わり，荷物を積んできた大きな船を戻して，7月8日全員再び石狩川を遡上した．Shushu(志寸川？)・Oshirara(尾白利加？)・雨竜川・Memu(アイヌの家3軒・芽生？)等を過ぎ，7月10日，激流・絶壁・奇岩で名高い神居古潭に無事到着した．

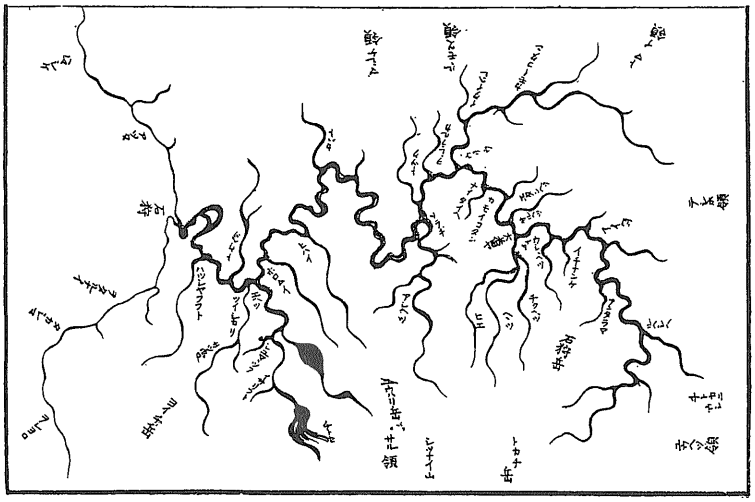
4. 神居古潭—愛別(7月11日—7月15日)

明くる11日，人跡未踏の奥地へ入る覚悟の上か，ライマンはケプロンへは報告書を，山内徳三郎へは指導に関しての手紙をしたためた後，父サミュエルに手紙を書いた．合間に急流から荷物やカヌーが引上げられるのを傍見したり，神居古潭の岩石を調べたりして一日を過ごした．大理石はペンシルベニア産と引けを取らぬとほめ，柱や床等に使用するよう勧めた．なめらかな表面をこすって目を近づけ，自分達の映像を見て喜ぶアイヌを魅了した蛇紋石も，特筆すべき良質な岩石であろう．

12日は春志内に移動し，次の日はアイヌ数人と日本人船員を送り返し，いよいよ上川盆地横断の準備完了．7時48分ライマン・秋山美丸(地質補助・補給係・昆虫収集係・測深手)・通訳(地質補助代理・植物収集係)・コック・ボーイ・アイヌ語通訳の日本人・日本人人夫2人・アイヌ人夫48人，総勢56人が dug-out カヌー(巨木をほり貫いた独木舟チップであろう)11そうでくり出した．

江丹別川を過ぎる頃から，丘陵は次第に低くなり，オサラッペ川にくると流れの激しさが衰え，梁(やな)がかかっているのが目に止った．豊平川以来の梁であり，石狩川上流のアイヌコタンの最初のサインである．

石狩岳が視界に入ってくる．ライマンは，上川盆地の風光絶佳に心を奪われ，思わず「日本のカシミール」と叫び絶賛した．もし帝が次回に札幌へ行幸された時は，是非ともここまで足をお運びになるべきだと力説したのみか，ライマン独得のブループリ



第4図
石狩地図　石狩日記(松浦武四郎)より

ントまで仕上げている．

先ず，上川盆地の旅は全く容易であると前置し，喫水5らフィート以下の蒸気船で，石狩太から神居古潭15マイル圏内まで約110マイルの距離を約11時間，そこから先は，川が浅くなるが，上陸地点に着けば，約8マイルの四輪馬車道を経て，石狩上流の楽園中心部に達する．もし帝が夜明前後に石狩をお立ちになれば，快適な蒸気船内でゆっくりお休みになると，午後4時には神居古潭へ．そこからお馬車で，5時には今我々がキャンプしている盆地近くまで到着することができる．帝は大自然と珍らしいキャンプ生活を大いに楽しまれるのではなかろうか？　加えて離宮をお建てになりたければ，神居古潭の大理石や蛇紋石を用いては如何，これがライマン案の大略である．榎本守恵・君尹彦著「北海道の歴史」によると，明治20年代に上川離宮案が実り，建設予定地まで定っていた．思いつきの出所は，ライマン以外に誰があり得よう！

当日，松浦武四郎の「石狩日誌」(第4図)の地図にある有名な大番屋は一見に値すると，陸路では行けないので，ライマンは秋山・通訳，それに数人のアイヌと共にカヌーで忠別川を下り，探索に出かけた．ライマン一行は，背の高い草の中にぽつんと立っている15フィート平方のさびれた木造の建物を見つけた．“これが大番屋だ！”．近づくと約20年前鮭漁隆盛の頃，石狩太の商人が建てた倉庫はすっかり荒れ果てている．割れ目からのぞくと，屋内はがらんとしていて床の上には網の様なものが横たわっているのみであった．同時にライマンの心の中にあった最盛期の大番屋の大いなる幻影が消散したであろう．

14日7時20分出発．川巾が漸次狭くなるにつれ，川の曲り目が見やすくなり，激流もうまく避けられ，棹を主に用いたのが効いたのか，$19\frac{1}{4}$マイルの楽な舟行となった．時たまアイヌのキャンプやコタンがあるものの，平野や高原をバックに，川岸に沿って，柳と疎林があるだけで，奥地の様相を呈し始めた．15日午前10時過ぎ，1873年 James Wasson (開拓使測量長)が冬の訪れのため，調査を打切った最終地愛別に到達した．

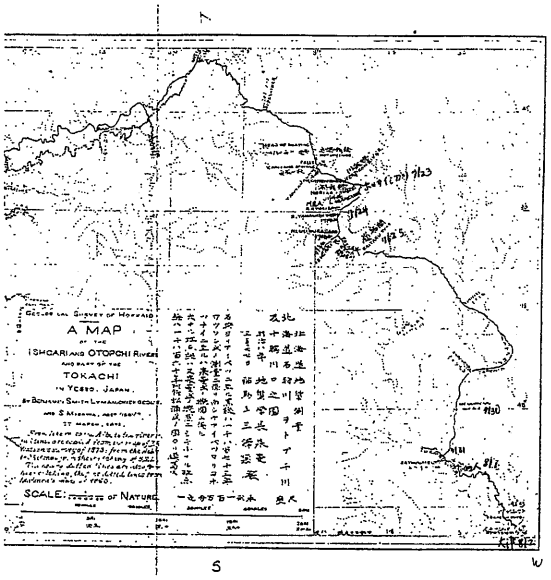
5. 愛別—ホロカイシカリ(7月16日—7月23日)

神居古潭を出て以来，ライマンは灼熱に悩まされ，傘の下で日光の直射をさけスケッチを続けた．

安足間(あんたらま)支流辺りより対岸は断崖がそそり立ち，奔流はいよいよ激しくなり，17日はたった$7\frac{1}{3}$マイルで舟路を終えた．次の日は留辺志部に辿り着いた．一行中ここまで来たアイヌは唯一人で，彼は1872年高畠利宣の滝調査に参加した経験がある．午後には近くにかすんだ十勝岳が見え，しばらく進むと石楠花が咲き乱れていた．

19日，忠別川界隈を去って以後，見失っていた雪をいただいている石狩岳が姿を現し，十勝岳は見え隠れする．Hombeushi と言う川口で昼食．

上陸前，奔流がどっと舟中に浸入，2,3インチ水びたしになった．ライマンは，地質測量器具をつめた小さな手さげかばんをゴム引きの覆いで被っておいたので無事であったが，彼自身はゴム引きの上着



第５図　北海道石狩川　テトプチ川及十勝川口之図

を着用していたものの，ずぶ濡れになった．２日前には米を積んだ舟が水浸しになった．

ライマンが上下の衣服を乾かしていると，アイヌ達がおずおず近くまでやって来て，荷物を積んだ舟は，これ以上先へ行くのは不可能な事，またガイドは，高畠一行はここで荷物を置いて軽いカヌーで更に進み，その後は滝まで歩いた体験を語った．ライマンは陸路で行くか水路で行くか，アイヌ達に判断を任せた．彼等は長い時間をかけて話し合っていたが，陸路を選んだ．

早速陸路行きの準備開始．成るべく荷物を軽くするため，必要な物と札幌へ送り返す物に分けた．濡れた物はすっかり乾かし，かばの樹皮に包んで湿気を防いだ．これはアイヌの生活の知恵に違いない．ともかく支度に追われて忙しく，昼食で休んだ場所にテントを張り２日間留まった．

前進の日，21日がやってきて，アイヌ一人一人重い荷を背負って出発した．ライマンはと言えば，ジンバル(称平環)にこわれて応急措置を施したコンパスをつるし，そして一寸目を低くするだけで方角が読めるよう，それを空いた双眼鏡の皮ケースにおさめ，胸にぶらさげた．また歩数計の代用として，18個の小石をポケットに入れた．小石は２種あって，一つは百歩毎に，もう一つは千歩毎に，一つのポケットから他のポケットへ移し，歩数を計った．特に峡谷ではもってこいのペドメーターであった．

しばらくは，森や小石の多い川岸の歩き易い道を歩いたが，次第に道は険しくなった．江戸で毎日５マイル乃至８マイル，時には10マイル歩いても疲れなかったライマンは，手さげカバンを持ち，胸にケースをかけ，永久に続く歩数を数えて24歩毎に立ち止まるだけなのに，次の休憩を絶えず渇望した．正午に川辺で昼食をとった時は，歓喜した．２時半に目的地の温泉に達した．滝はすぐ先にある．精根を使い果したにもかかわらず，歩いた距離がたった$4\frac{2}{3}$マイルと知った時のライマンの心境や如何に？　この近くにテントを張ることに決め，更に先へ行くと，行手の川縁に大岩壁が立ちはだかっていた．

ライマンは周囲を見回し，すぐに次のようなアイディアを浮べた．①絶壁をよじ上る．不可能ではなさそうだ．②温泉の下を通り，川を渡って断崖がない対岸に移る．③岩と岩の間に丸太をかけて対岸へ行く．ライマンと同じく秋山は最後の案に賛成した．

テントが張られた後，秋山はアイヌを動員し行動を開始した．幸に川岸には丸太を含む流木が多い．彼は早速手頃な木を最短距離にある岩にかけ，自らさっと，岩へと木を渡ってテストした．ライマンが温泉調査をして戻ってくると，対岸へ35フィートの距離を残し，岩から岩へと丸木が置れていた．秋山は細い丸太をもっと先に渡そうと激流と取組んでいる最中だったが，駄目だとみると，アイヌに丸太につかまって川を渡るよう命じた．アイヌ達がたじろぐや，待つことはできぬとばかり，衣服を脱ぎ始めた．と，一人のアイヌが川へ入り，もう一人が続き，秋山が後を追った．刹那，彼が流れに飲まれたのではないかと，手に汗を握るシーンがあった．それがはずみとなり，アイヌ達は次ぎ次ぎと渡河した．斧やのこぎりがロープで送られ，対岸の木が伐られ，川岸に運ばれた．やがてアイヌ全体の協力で，頑丈な丸太がかかり，夕闇が迫る前に，丸木橋が仕上った．

ライマンは，Mr. 秋山の判断力・行動力・リーダーシップが抜群であり，しかも彼はヤンキーが最も誇る高潔と剛毅な気質を有すると報文で誉め称えた．この逸話からも，秋山の人柄が推察できる．

翌日ライマンは，岩間にかかったよく滑る丸木橋を，アイヌがいとも軽やかに，自由自在に渡るのに

感嘆した．彼自身は，手すり代りのロープの助けで橋を渡り，両端では屈強なアイヌに支えてもらった．丸木橋を無事に渡ると，行手に早瀬・絶壁・滝・巨岩・激流が待ちかまえ，よじ登りと衣服をぬいでの渡河の繰返しで，大峡谷への挑戦は筆舌に尽し難い．日本人達が自力で渡ろうとして，あわやの寸前にアイヌに命を助けられる一場面もあった．しかし息をつくため，足を止めて四方を見渡せば，眼前に天下の絶景が展開した．この辺は正しく秘境で，アイヌ達は地名を知らない．秋山温泉・秋山川・佐藤川(通訳の名)：ケプロン峡谷・ケプロン川と命名しながら進み，遂に5時過ぎ，川の南西側に20ヤードの広さの平地をみつけ，キャンプ地とした．疲れ果てたライマンは，彼専任の大男のアイヌに負んぶされて川を渡り，5マイルの行程を終了した．

23日ライマン一行は，Horikaishcari(ホロカイシカリ？)を通過し，前進すると川があり，荒井(郁之助)と名づけた．現在の層雲峡・大函・小函を遂に脱出したとみてよいであろう．

6. ホロカイシカリ—kaitaku峠(7月24日—7月25日)

平地が増え，徒渉も楽になった．今まで南下していた川が，南西の方向をとる．翌24日は，昨日と同じく全くの土用の暑さで，蚊の襲撃に悩まされるが，風向きが変ると蚊の大軍は飛散する．谷と川が続き，大鳥(圭介)川の名が生まれた．

突然アイヌ達が物に取りつかれた様に，大鳥川を約2百ヤード突進したが，ライマンが呼び戻そうと思う間に，対岸のうっそうとした茂みから現れた．どうも十勝への道を見つけたと思ったらしい．Horikashcariあたりから，十勝へ出る進路につき度々アイヌの意見が出た．山内(堤雲)川・西村(貞陽)川・開拓使川と名をつけていく中に，道の様子が次第に変化し，こんもりとしたもみの林やすっぱい野イチゴ，真盛りの石楠花が出現した．また大犬や多くの熊・鹿の足跡を発見した．

25日，二人のアイヌが足を痛めたので，10日分の米を与え，しばらく休養するようにと，後に残して出発した．山頂に達し十勝を一望しようと，狭くなっていく道を岩山へ向って進行中事故が起った．ライマンの手記を引用する．

遂に小川の水源・小さな泉を通り，間もなく峠が見えるのではないかと期待しながら，険しい山腹を登っていると，下から大声がし，廻りのアイヌもガヤガヤしだした．事故が起ったので，Mr.秋山の助けを求めているのだが，熱心な彼は，もうずっと先へ行っている．アイヌ達が後方のアイヌの一人が大事故に会った，多分腕を折ったらしいと，日本語で知らせてくれた．背後にいた通訳は，すでに降り始めていた．山頂近くまで登っているので残念だったが，限られた外科知識と経験があるので，皆よりはずっと役に立つのではないかと思い，私も引返した．現場に着くと，こめかみに近い額の一角に，大きな尖った石があたり，アイヌは深手を負っていた．通訳と人夫の通訳が彼の側にいて，近くに1,2人のアイヌが残っていた．傷の上に木の葉をあて紙で結んであり(こよりの様なものでないだろうか？　筆者)，当人は大へん苦しんでいるように見えた．殆ど気絶状態にあるようにも，怯えているようにも，また皆の注目に興味あり気なようにも見えた．私は偶然にポケットに絆創膏を入れていた．以前St. Lawrence川の下流で，帆桁で打ってこの様な傷をした人を，経験者の指導の下，救急処置をしたことがあったので，絆創膏を細く切り，傷口に十文字にはった．そして誰か彼の荷物を持ってやるように(幸いに米は減少し軽くなっていた)，彼には，休み休み来るように云って引返した．再び頂上近くまで来ると，派手な風呂敷(原文はスカーフ)をひるがえして下りてくる秋山に会った．旅が終るまで，傷ついたアイヌは，この明るい色彩の風呂敷を得意気に頭に巻いていた．もし落石がこめかみへ1インチ近かったら，疑いなく彼は死んでいたであろう．注2)

やっと海抜6千フィートの開拓峠へ達した(第5図)．眼前の川は殆ど平坦な地を東南へ流れ，南北の山脈に突きあたる前に大川に合流，松浦の地図で示すように，その後は多分南東へ流れを変えているのだろうと予測した．その曲りは山の背後にあって見えないが，コタンKuttarushi(屈足？)があり，ライマン一行の食糧その他を積んだ舟が待機しているはずである．盆地以外は，尾根また尾根で，殊に南は峻岳がそびえ，西は石狩岳と忠別岳の雪をかぶ

った頂が望まれる．後者は“多分”と注が付くが，「日本蝦夷地質要畧之図」の十勝岳と石狩岳の位置が逆なので(ミスプリント？)，kaitaku峠が現在の何処か想像するのは難しい．この峠で，ゆっくり歩いている大熊を，目敏いアイヌが見つけたが，ライマン一行に気づくと，そそくさと去って行った．

7. 大津への道(7月25日—8月2日)

頭に明色のほうたいを巻いたアイヌも含め，全員山頂に集合．十勝へ如何に下るか協議した．峻崖を這い下りる案に対して，ライマンは雪の積っている路に沿って下りる案を唱えた．支持があまりないので，率先垂範，登山は彼の得手でないが，傘・水平棒それに長靴のかかとに頼って，滑り下りないよう注意して，徐々に降下した．雪の残った険路の半分まで下りた時，上から良い道が見つかったと声があった．すでに疲れていたライマンは，例のアイヌの大男にロープで引っぱってもらい，元の地点に戻った．百フィートそびえる尾根に沿って，南へ約3百ヤード歩き，雪の土手で休んで元気を取戻し，5時頃再び下山を開始した．

一行は草や灌木につかまって，ジグザグにけわしい斜面を下りる．下山中，アイヌが背負っていた柳行李が，フルスピードで落ちて行った．もし彼が行李を放さなかったら，彼もまりの様に七百フィート下の狭い平地まで，ころがり落ちたに違いない．平地で休憩後，各々グループに分散して降りた．秋山はずっと後方で，しんがりの石狩アイヌを叱咤激励しながら，山麓へ向っている．ライマンと共に行動する千歳や白老のアイヌの方がたくましい．突き出た絶壁に遭遇し，重い荷を担いだアイヌ達は迂回せねばならなかったが，ライマンと通訳は無事通過，コックは滑り落ちたが，幸に骨折を免れた．

なお進んで行くと，小さな谷間があり，その先には小川や滝があるではないか！　すでに8時，夜の闇は容赦なく迫っているので，谷間で野営することになった．空腹だったこともあろう，悪条件の環境で，コックが作った何時もよりうまい夕食を楽しんだ．谷間は狭くテントを張ることができず，それぞれ工夫して寝床を作り，眠りについた．

翌26日，アイヌのさけび声に応じて，三百ヤード下で空腹のまま野宿したグループの一人が，ライマンのキャンプへ駆付けた．散らばっていたグループが次第に集り，約2時間炊事と朝食にかけ，満腹した後出発．依然として難路であるが，処々平坦な土地が現れ，山麓近くになって行くのが，フィールドブックを通し感じられる．

正午小川の分岐点で，全員集合した時，アイヌ達が極度の疲労のため，明日まで休ませてくれと願い出た．彼等の願いは叶えられ，26日の旅は1マイルで終了し，川辺にテントを張って休息した．6日前に舟を捨てて以来，1日平均行程が5マイルだったが，27日は10マイルの記録が出た．

断崖や支流の数が減り，度々平地を歩いた．午後一行はアイヌが切った木や朽ちたキャンプを過ぎ，人里近しの印象を受けた．進行方向は南東，東よりだったが南へ変じ，更に南南東へ移った．アイヌ達の足どりは軽く，早くなり，休憩になると重い荷をどんと下して，オヒョウの樹皮(布やサンダルの材料となる)をはいだり，水中に石をなげて鱒を集め，刺したり，釣ったり，彼等は元気一杯である．日本人人夫や使用人までが，鱒釣りの熱に浮かされた．

28日7時15分出発，11時近く犬がほえる方角へ足を向けると川辺に一軒のアイヌ住家があった．主人によると，川は十勝川でなくて，Otopchi(音更川と判断したが，オトプケの名はあっても，オトプチは調査した限りでは見つからなかった．筆者)で，舟が待つ屈足へ行くには，先ず札内に出て，十勝川を遡る以外にない．しかも4日かかると言う．舟で旅を続けていたら，約5日と見積っていたところ，陸路でここまで8日かかり，なお札内まで4日とは！　失望よりも驚きで，その上12日分の米を計り違えたのか8日で食べ，4日分しか残っていない．しかし，ライマンは今まで通りがんばれば，1日半で行けるのではないかと考え直した．主人に案内してもらいたいと頼むと，弓とえびらだけの身軽さで加わり，全員正午に出立した．

始めは，既に札内盆地を進んでいると信じ，意気軒昂だった．相変わらず，山あり，川あり，丘陵ありで，渡河の時は大男の助けを求めた．荷物が少なくなったので，彼はライマンに肩の上の荷に腰掛けるように勧めた．この思いつきは一石二鳥で，大男は二度渡河する必要がなくなった．5時過ぎ，川辺のキャンプで落着いた後，ガイドから，その日はたった全距離の$\frac{1}{4}$を歩いただけなのを聞き，落胆すると共に，この調子では，海岸に出るまでに，飢え

No.	Where from.	Name.	Age.	Height (Feet.)	Weight.		Hair.			
					Kamme.	Pounds.	Head.	Eyebrows.	Moustache.	
1	Shinai	Chabo	"36"	4.80	16.2	135	Thin, mostly short.	Rather thin and small.	Thick, not very long.	Ra
2	"	Atushiu	"35"	5.38	17.6	147	Thick, mostly short.	Short and small.	Thick, not very long.	Ra
3	"	Yaegato	35	5.28	16.3	136	Very thick and long.	Small, light.	Thick, long.	Ra n.
4	"	Chikanakuru	33?	5.07	16.0	133	Very bald (side hair.)	Rather full, mid. size.	Thick, long.	ve
5	"	Shimnguru	33	5.49	18.0	150	Quite bald (with side hair.)	Rather light.	Thick, heavy.	Th
6	"	Kusarongora	"321"	5.46	18.6	155	Slightly thin, but long.	Large, short and thick.	Thick, long.	Rat
7	"	Ikuyange	"271"	5.53	17.0	142	Thick, not long.	Small, light.	Thick, not long.	n.

第6図　アイヌ身体検査リストの一部

がやってくるのではと，恐れ憂いた．

翌日13マイルを歩き，Surukonai コタンでキャンプを張った．札内まで7里，一日がかりを知り，アイヌの距離観念にさじを投げたようだ．

30日，Sosukememu, Memumenu, Nobusamkusubetsu を通過，行けども行けども札内は遠く，すでにアイヌの距離測定を信用しなくなっていたが，もう少しとなだめすかされ$19\frac{1}{2}$マイルも歩き，札内まで半里の処で，小石を放り出し，ライマンは力尽き果てた．

ここでライマン一行の行列にレンズを向けてみよう．ライマンは，普通は先頭に立っては進まない．森を通る時は，常に日本人と共にしんがりにひかえ，約50人のアイヌが行進してこしらえてくれた道を歩く．みな，荷・用具・服装はまちまちであるが，全員共通に長い杖を所有している．これも途中で応急処置として，弓や釣竿，または水準標尺に代用した者がいる．アイヌ人夫は，額に広いバンドをめぐらして荷物を背負っている者，中には長方形の枠を胸にぐるっと縛っている者もいる．

ライマンは「私ときたら，この行列で，いやどんな行列でも目立った存在に違いない」と述べている．即ち，小型器具・ノート，その他旅行に必要な諸々をつめたかばんを下げ，コンパスを収めた開いた双眼鏡ケースを首にかけ，その上ひもでしっかりと体に巻きつけた姿である．衣服は見る影もなく，黒いフェルト帽子は，かんかん照る日の下では耐えきれず，ずっと前から無帽．木の下を這い，木々の間を縫うのであろう，頭髪は乱れ，洋傘は主に杖代りにしたのでぼろぼろに近い．

ヤンキー独立精神の下，行列を作るのは稀で，出発と共にグループに分れ，各グループはリーダーが道をえらぶことができたし，わらじのひもを結ぶとか，一寸した休憩は自由であった．時には一時間以上の差はあったが，夜になれば，キャンプ地に全員辿りつき，一致団結，皆和気あいあいの尊敬すべき仲間だった．

ここで筆者は少し脱線し，ライマンをめぐる事件を紹介し，彼を弁護したい．上川盆地・十勝の旅の後，ライマンは開拓使役人である通訳佐藤秀顕（ひであき）を，自分には最早必要なしと開拓使へ申し出て紛争を起こした．通訳なしで調査旅行を続けることができると思ったのであろうが，理由はこれだけではあるまい．石狩川上流で全員と共に辛苦や喜びを分かち合った経験を通し，ライマンはコミュニケーションを円滑にするには，単に言葉によってのみでなく，信頼・尊敬そして善意な行動が如何に大切であるかを，身をもって体験したのではなかろうか？　今日に於いても，人間の善意が，異国に住んで，どれ程外国人同志のコミュニケーションを円滑にするかを経験した日本人は少なくないと思う．

31日，ライマンはキャンプ地に留まり，はえに悩まされながら，十勝川に待機する舟の情報を待った．極度に節約した結果，食糧は3日分の余裕をみせたし，全員由々しい事故なく無事だし，感謝と安堵で一日ゆっくり休息した．

8月1日，石狩上流の20人のアイヌと人夫の通訳が別れる日がやってきた．彼等は来た道を通って帰郷する．ライマンは，十勝川でライマン一行を待つ舟が，札内に米を託しているのを知り，彼等に充分な米を与えた．別れの言葉が交され，アイヌ達はひげを撫ぜて別離を惜んだ．殊に，例の傷ついたアイヌは，殆ど直った額に手をあて，満面に感謝の笑みをたたえ，別れの挨拶をした．

正午朝早く十勝川の舟を捜索に出かけた10人のアイヌが，たった6里先で探し当てたと舟と共に戻ってきた．舟からも各方面に捜索隊が出され，ライマン一行が大津に到達して数日後に戻ってきた一隊もあった．舟は札幌から，荷物や手紙も運んできた．

1時21分舟で出発，白人（ちろと）（但しフィールドブックでは Shiroto）を通り，南西へと進み途別まで下ると，小さな支流が多く，川巾が狭くしかも浅瀬で，時々荷物を下ろしては前進し，航行は容易でなかった．

翌日は一日で大津に達しようと，5時45分出立した．曲りくねる川を巧みに運航し，4時半に大津に到着．舟からの眺めでは多数のカヌーと行き合い36軒近くのアイヌ住家があり，小さな神社さえあって活気を呈しているように見えたが，実際はアイヌの家2軒，日本人の家1軒，本陣それに幾つかの倉庫があるのみのひっそりした村であった．しかしライマンは清潔な本陣に泊り，最高のぜいたくを味った．

8. アイヌ

8月4日は，残り26人のアイヌがいよいよコタンに帰る日である．ライマンに請われ，彼等は身体検査を受けた．ライマンは，白老アイヌ10人・千歳アイヌ8人・石狩アイヌ8人，年は14才から41才までの26人の身長・体重・毛髪・容貌についてのリストを作った(第6図)．アイヌの平均身長は，5フィート$\frac{1}{4}$インチで背は低い．渡河の度にライマンに肩を貸した大男は5フィート$8\frac{1}{2}$インチ．彼の体重は183ポンド．アイヌの平均体重は141ポンドである．日本人はアイヌは毛深いと言うが，眉がたれ下っているのにかかわらず，顔や体にあまり毛がない者，頭に禿がある者が意外に多かった．

ライマンは旅行中，アイヌをよく観察した．アイヌが非常にエネルギッシュなのをあげ，札内近くで舟を待つ間に，元気を取戻したアイヌは，夜は11時まで詠唱し，起床時間を定めていなかったら，翌朝は4時半頃起きていたであろうと，精力にあふれた彼等を描いている．胃の消化・吸収力はよく，米は日本人人夫の半分しかとらず，魚や肉で補充もしない．また偶然に数回見たアイヌの便は著しく少ないとある．アイヌの女性については，通常口の周りの入れ墨を大へん気にしているのか，顔の下側をかくして地面にうずくまっているとか，男性よりずっと背が低く，顔はデリケートで小さく良い形だと観察は細かい．特に面白いと思ったのは，男は箸で食べるが，女は進歩的でスプーンで食べるとある．もじゃもじゃしたひげは，スプーンに適さないのかと述べ，酒を飲む時は，小さな紙切りナイフの様な木ぎれで，ひげを支えて飲むと付加えている．

ここでアイヌ気質をうまくとらえた描写を紹介しよう．アイヌは日本人と違い忍耐強い．身体検査中，辛抱して番を待っているアイヌに，花火の一種へび玉に火をつけ，蛇の様な灰が残る余興を見せたら，大いに興味を持ち，面白がり，心から笑った．彼等は，何につけてもよく笑う．魚を捕えても，捕えそこなっても笑うし，ゲームに勝っても，負けても笑う．カヌーから相手のカヌーへお互に水をかけたり，いたずらをして，悪ふざけするが，度を越すことはない．一度だけ，14才の若者のからかいが緊張した事態になった時，仲間に注意されて，すぐ黙ってしまったとある．これらすべてライマンの実見であろう．その他アイヌの集団生活，木彫・言語，他の種族との比較についても少し触れ，ケプロンへ書き送った．8月4日まで大津に滞在，翌5日からいよいよ釧路(くすり)・根室(ねむろ)への旅が始まる．

注1) かむいこたん．ライマンは，Kamoikotan と記す．
2) Benjamin Smith Lyman (1875): Report of a geological trip through and around yesso. Tokei, Kaitakushi, p. 371-372.

FUKUMI Yasuko (1994): A note on Lyman (10)—Geological survey in central Hokkaido.

〈受付：1994年2月4日〉